

『死の島』の結末

くビキニ実験前の時間設定について

上村 周平

1

『死の島』のストーリーを簡単に説明せよと言われれば、まず相馬鼎、相見綾子、萌木素子らの出会い・交流・結末といったものを語らなければならないだろう。より詳しくと言われれば、作中小説や「内部」の被爆体験のストーリー等もあとから付け加えなければならないが、本論では、最初にあげたストーリー展開中の結末の時期について考察したい。ところで誤解がないように申し添えておけば、『死の島』の下巻末尾には文字通りの「終章」がある。「それはいつのことだったのか」と断つてあるように時期ははっきりしていないが、「それが広島島の病院よりも以前であることは決してなかった」とあるように、この場面が時系列で考えた場合に、小説内の場面としては最後にあたるのは言うまでもない。

私が取り上げたいのは、萌木素子、相見綾子が心中し、「朝」(素子死去、綾子回復)、「別の朝」(素子発狂、綾子死去)、「三つの朝」(二人とも死去)と結末が三パターンに分かれてはいるものの、目次を参照すれば分かる昭和二十九年一月二十三日という期日で

ある。「終章」はこの日から「幾日か幾月か幾年か経った後」なのかという点は一切分らないが、「終章」を除いて目次に明示された時間としてはこの期日がもつとも後になる。周知のとおり、歴史の上ではそれから一月あまり経った三月一日にアメリカがマーシャル群島で水爆実験を行い、第五福竜丸が死の灰をあびるといふ事件が起こっている。

そうしたことを念頭に置くと、『死の島』冒頭の相馬鼎の見た水爆の夢は、正夢となった感がある。『死の島』は架空の小説ではあるが、その夢のあと目を覚まし、昭和二十九年一月二十三日付の実際の朝日新聞(朝刊)を相馬が読んでいるシーンも挿入されている。あたかも相馬鼎という人物がこの世に実在したかのような設定になっていて、小説の時間と実際の現実の時間との間に通路が存在するのが『死の島』である。こうした設定がどういう意味を持っているのかを考えていきたい。なおこの問題を考える上で、萌木素子の存在は欠かせない。被爆者としての彼女の体験・言動をたどりながら考察をすすめたい。

なお引用は新潮文庫版『死の島』(上下巻)による。³⁾

2

萌木素子が、相馬鼎、相見綾子との会話の中で、「被爆者」について語る場面がある(「一四六日前」下巻)。その中で平和運動に参加する被爆者と、そうではなく自分が被爆したことも忘れてしまいたいと思っている非活動的な被爆者の「二種類の人」がいて自分は後者のタイプだとし、その理由をおおよそ三つ以下のよ

うに述べている。

一つ目は「あの時も何もできなかった。それから何も出来なかった、出来る筈もなかった」「わたしの中の一歩大事なのが、(中略)勇気が根こそぎ奪われてしまっている。」という無力感が強く残っていること。二つ目は、『死の島』では被爆者差別の問題を糾弾するような場面はないが、自分が「被爆者だということ」を人に知られたくない」という羞恥心があること。三つ目は「運動というのは結局は政治でしょう。政治は人間を救えはしない」という平和運動への失望があること。ただし政治を否定する発言自体が政治的であることにも注意しておきたい。そして会話の中身は自分が孤独な被爆者であることを強調するかのような内容になっていく。

「祈りというのは、自己満足のような気がするわ。共通の苦しみがあれば、他人のために祈ることが出来るでしょう。しかし原爆というのは特殊の経験で、他人には絶対に分からないのよ。それは一般的な苦しみとか悩みとかいうものとは次元が違う。それは別の意識なのよ。あなたがたの意識とは違った意識なのよ。」

その時相見綾子が低い声で口を挟んだ。

「でも素子さん、あたしはあなたのために祈ることが出来るわ。」

「ありがとう。でもわたしは、被爆者だからって同情されるのは御免よ。」

……原爆がこの人に与えた傷というのは、孤立を潔しとするこの軋さなのだ。連帯的なものを受け付けようとしなないこの

意識なのだ。彼女は広島にいた一月間を、完全に孤独な状態で過ごしたに違いない。自らをも恥じ、また共通の苦痛を経験した仲間たちをも恥じていたに違いない。

(「一四六日前」下巻二八九)

同情されるのを拒絶するのは、原爆が「特殊の経験」であるために、「同情」のしようがないということも考えられるが、何よりも「被爆者」として見られること自体への拒絶があるだろう。しかし、過去は変えられない。被爆に限らず一度体験したという事実は消しようがないために、本人にも、周囲にいる人間にも、「被爆者」として見られる「見る」ことの根本的な解消は不可能である。「同情されるのは御免よ」という強気の発言の裏には、根本的な解消がままならないことへの苛立ちが含まれている。

被爆者の苦しみが「特殊の経験」であること。『死の島』はそれを「内部」のカタカナ部分でたどっていく。カタカナ部分は萌木素子の被爆直後の悲惨な体験が記されており、言いかえれば解消しようのない忌まわしい記憶で構成されている。ただし、カタカナ部分の出来事は、萌木素子の「固有」の体験と限定できるものではなく、被爆者に共通する事柄で構成されている。

たとえば、素子を「オ母サン」と呼んで死んでいく「女ノ子」の挿話の周辺をたどってみる。素子は被爆直後の広島をさまよい歩き、たどり着いた救護所の手伝いを申し出る。最初のうちは負傷者に水や食料や薬を振る舞う係だったが、日に日に死者が増え続けたため、遺体処理(火葬)の手伝いをするようになる。悲惨な状況を前にして一時的に人間的な感情を失った素子は、「物」化した自分を回復すべく、「物デハナイコトヲ証スルタメニ」手

伝いをしていたはずだったが、

ヤハリ此処ハ地獄ダ、ワタシノ知ラナイ世界ダ、ト彼女ハ眩イタガ、ソノ地獄コソ彼女ガ今生キテイル世界ダトイウコトヲ彼女ハモウ決シテ疑ワナカッタ。目覚メテコレガ夢デナイト知ツタ以上、逃レルトコロハドコニモナカッタ。ソレデモ彼女ハ、ワタシハ生キテイル、ト身ヲ護ルタメノ呪文ノヨウニソノ言葉ヲ眩キ、生キテイル同類タチヲ眼デ負イ、決シテ寝テイル死者タチモ、マシテヤ火焰ニ包マレテイル死者タチモ、見ヨウトシナカッタ。タダ物ガ焼ケテイルダケナノダト考エタ。

「先生、ワタシニモ何かサセテ下サイ。」∴患者ノ意識ノアル間ニ必要ナ記録ガ取ラレテイタカラ、ソノ記録ト照合シナガラフィルムノ袋ニ住所姓名年齢ナドヲ詳シク書キ込ムノガ彼女ノ役目ダッタ。《中略》この後死を看取った「女ノ子」が茶毘に付される光景を目の当たりにする》

「セメテ棺ヲ。セメテ人間ラシク棺ニ入レテ焼イテ頂戴。ソレハワタシノ子供デス、ソレハワタシノ妹デス。ソナナ裸ノママデ焼クナンテ、アンマリヒドスギマス。」

（「内部J」下巻二九五頁）

死者たちを「物」扱いたくない限り、作業のできない状況である。

よかれと思つてしたことが（「オ手伝」）、裏目ででしてしまうという皮肉な状況が描かれている。抜け道がないのである。死者だけでなく、生者も人間であることが不可能な状況、つまり人間らしさを失つた状況が示されている。そしてこの場面で一時的に「人間回復」がもたらされるのは、死を看取つた「女ノ子」を眼にし

たときである。

悲劇とは「自己と世界との間に見せかけの距離を設定した上で和解へと導く」からくりであるという指摘がある^③。とすれば、死者を「物」扱いたしながらもその後で棺に入れられない「女ノ子」（弱者）を見ることで、「セメテ棺ヲ」と叫び人間性（憐れみの感情）を回復したようなこの場面は、どこかに和解がある悲劇的場面であるのかもしれない。

しかしそれは早計であつて、こうした苛烈な体験は意識的にせよ無意識的にせよ記憶として残る。被爆体験について相馬と語る場面で素子の口から出たのは「わたしは決して忘れられないのよ。」「あなたの世界は健康と平和と、それから、そうね幸福とから成り立っている。あなたは癒える傷と癒えない傷との区別が分からない。あなたはいつでもより良い世界への進歩があるし、希望というものがある。綾ちゃんだつてきつとそうでしょう。しかしわたしには、そんな健康と平和と幸福との世界なんて、まったく縁がないのよ。進歩もなければ変化もない。だいいち時間というものがない。一度受けた傷は決して癒されない。いつでも疼いている。」（「十七日前」下巻三一七〜三一八頁）という。「だいいち時間」というものがない」というのは、時間の経過で解決するよくな問題ではない、ということだが、これは何も萌木素子に限つたことではない。同様のことは精神医学的見地からも指摘がある。長くなるが引用しておきたい。なお引用文献は、最近の出版物であり、昭和二十八年から二十九年を舞台とする小説に援用するのはかなり無理があるかも知れないが、萌木素子とその苦悩を時間経過によつては解決しないと述べている点も踏まえてお読みたい

だきたい。

：被爆者のフラッシュバックは軽くなることがない。被爆者はだれでもあの日の記憶を忘れ去るような生き方を選ぶとうする。実際、原爆体験をいったん棚上げしなくては現実生活は営めないし、そうしている。学生なら学校に戻り、大人は働きはじめる。それが順調にいったとしても（多くは次に述べるごとく順調にいったくないのだが）、音や光やにおいというごとき物理的の刺激がきっかけとなり「あの日の恐怖」に連れ戻されているからである。「連れ戻され現象」は、同じ被爆者の病氣・死でもっと強くおこり、自分の身体的不調でもっと頻繁に「あの日」に連れ戻されているからである。六一年たつたいまでも続いているし、「連れ戻される」たびに、心を受けた被害はあたかも治りかけた傷をきり広げるように、血が滴り、かつ罪悪感を強化しかつ変形していくからである。ここがこれまでのPTSDの概念と合わないところなのである。ふつう、PTSDは「心的外傷」を受けた日から、日数が経つにつれてしだいに薄れていく。それにとまないうフラッシュバックはしだいに軽くなっていく。ところが被爆者の場合は遷延していく。というよりいまなお続いている(on going trauma)のである。あるいは遅発性発症(delayed onset)が続いておこっているといってもよい。……(中略)……

さらにフラッシュバックは繰り返しているうちに微妙に変化してくる。はじめは「あの日、一瞬にして消えたまち、幽鬼のごとき被災者、大量の異形の死体」が主であり、そこにはさまって「自分が助けることのできなかつた」個人的な工

ピソードが加わる。そのうちに感情麻痺から発した「自分が生きていることの罪」が強くなると、フラッシュバックを起こすたびに「助けることのできなかつた」個人的なできごとの比重が増してくるのである。「自分の生」が死者の上にあるといった場合、その死者は「見捨てた不特定多数」より特定された個人である必要はどこにあるのであろうか。贖罪のためには、具体的な個人が中心に坐っていたほうが自分を納得させられる……のであろう。⁽⁴⁾

「贖罪」とは和解であるが、ためらい気味に「納得させられる……のであろう」とあるあたり、この和解は成立しがたいものかもしれないが、精神医学による分析内容と、「女ノ子」の個人的エピソード等を含んだ萌木素子の「内部」とは整合性がある。相馬鼎が昭和二十九年一月二十三日の朝日新聞を読んでいたように、萌木素子も実在した被爆者であるかのようなのである。

3

ではなぜ実在していてもおかしくないような登場人物たちが『死の島』に配置されているのだろうか。それは以下のような状況を踏まえると見えてくる。

「日本において広島・長崎の被爆体験が、戦後の被爆者問題を含めて広く社会的に認識されるようになったのは、原爆被爆者らの訴えそれ自体によつてではない。その直接のきっかけになつたのは、第五福竜丸水爆被災事件（ビキニ事件）に対応して国民の間にわき起こつた原水爆禁止運動であつ

た。この運動の盛り上がりの中で、改めて広島・長崎の原爆被爆者の問題が浮上し、それまで社会の片隅に追いやられ沈黙を余儀なくされてきた被爆者に、公の場でその体験を語る機会が多く与えられるようになった。つまり、「聞く耳」を持つ人々の存在によつてのみ、被爆者のメッセージは社会的に確認される。／ではなぜ、この時期、人々は被爆者のメッセージに耳を傾ける用意ができたのか。それは、一口で言えば、米ソの原水爆実験が激化する中で、そして日本の漁夫が平時にかかわらず三たび原水爆の犠牲になるという事実を突きつけられ、今度は自分たちが被爆者になるかも知れないという恐怖が国民を襲つたからである。すなわち、原爆被爆者の言葉に表せないような体験と苦難は、周囲の人々がそれに対してわが身のこととして真剣な関心を抱くこと、さらにはそうした関心を惹起する国際情勢の存在という、被爆者を取り巻く環境・条件の如何によつて、はじめてその社会的意味が付与されることになった。／ここには、被爆体験認識をめぐる根源的な逆説がある。すなわち、被爆者らはその体験と境遇についての用意に表現し得ない、また社会的に理解してもらえないメッセージを持ちつつ、他方で彼らを取り巻く社会の側では、まさに一般の人々の想像を絶することであるだけに、人類の未来を予示するものであるかもしれない被爆体験に強い関心を示すという逆説である。⁶⁾

『死の島』冒頭で相馬の見た悪夢の内実は、実はビキニ環礁での水爆実験よりも、こうした国民がいだいた「今度は自分たちが被爆者になるかも知れないという恐怖」だったのかも知れない。

国民の関心が高まる前に、作品のなかでは一人の被爆者が亡くなっている（あるいは発狂していて精神的な死を迎えている）。身寄りのない苗木素子という作中人物は、ほとんど世の中に知られることのないまま亡くなっている（発狂している）。しかしながら、あともう少しすれば社会は彼女のセリフの意味を「逆説」的にすくい取つたのかもしれない。しかし『死の島』ではそうなる前の状況下に苗木素子を配置した。原爆で肉親のすべてを失い身寄りがないという設定だけでなく、彼女はこの点でも孤独な存在である。したがって例えば『草の花』の汐見茂思のような、対象喪失による孤独感（藤木忍、千恵子との悲恋）とは違つた側面を『死の島』では読みとらなければならぬ。

しかしながら、苗木素子は孤独な存在としてだけ読まれるべき存在なのだろうか。

ソノ町デ彼女ハ生レ、ソノ町デ彼女ハ育チ、町ト彼女トノ間ニハ眼ニ見エナイ愛情ノ絆ガアル筈ナノニ、ソノ町ハ（嘗テ町デアツタモノハ）今ハタダノ物ニスギナカツタ。……ソノ時瀕死ノ太陽ハ、最後ノ一撃デ、町ヲ荘厳ニ燃工上ラセタ。ソノ町ガ経験シタ最モ痛マシイ、悲劇ノソノ一瞬ヲ、今、太陽ノカデ再現シテミセルトデモ言ツタフウニ。ソシテ彼女ハ、彼女が實際ニ見ルコトノ出来ナカッタソノ瞬間ヲ、今、太陽ノカヲ借りテ見テルヨウダツタ。（中略）太陽が遂ニ没スル前ノソノ瞬間ニ、何カガ起リ、何カガ彼女二分ルダロウトイウコトガ、緊張シテ待チ受ケテル彼女二分ツタ。（中略）彼女ハ既ニ幾度モ死ンデイタノダ。ソシテ瀕死ノ太陽ハ、スベテノ死者タチノ顔トナツテ、血ノ涙ヲコボシテイタ。ソノ

顔ハ彼女自身ノ顔ニホカナラナカッタ。彼女ハ太陽ヲジツト見詰メテイタ。不思議ナコトニソノ太陽ハチツトモ赤クナカッタ。アラウル色彩ガ混合シテ白ク見エルヨウニ、高温ニ達シタ火焰ガ白ク光ルヨウニ、異様ナホド真白ナ太陽ダッタ。

(内部L) 下卷三九三頁く)

「太陽」が原爆炸裂の瞬間を「再現」している、あるいは萌木素子自身が「太陽」をそのように見だしている場面である。「彼女ハ既ニ幾度モ死ンデイタノダ」。これは廢墟で見かけた「黒焦ノ小サナ屍体」、「オ水ヲ」と訴えられながらも水を与えるまもなく亡くなった「女ノ子」、そして先に触れた「オ母サン」と叫んで息を引き取った「女ノ子」、そうした死者たちと自分を「アレハ彼女自身ダッタ」と重ね合わせ同一化しようとするのである。つまり死者達との連帯を志向するわけだが、この志向性は、成立しがたい和解を、唯一成立させる想像的なものである。

あの日 ひろしまの／碧空に／異次元への 地獄の門が／開いた ……

ひろしまが／無くなった／煮えたぎって／消えてしまった
煙の燻る 街の中は／死者たちの 葬列と／無惨な 人間の
残骸の 呻きに／満ちている

中国山脈の 西へ／茜に染まつて 膨れあがつた 太陽が
沈む頃／ひろしまは／崩れ落ちた瓦礫と／死に 満ち溢れて
くる (歩く) ⑥

作者・長津功三良は広島島の出身で、直接原爆には遭っていないが、爆心地に住み、新聞配達をしながら裸足で焼け跡を歩き回っていたという。しかし直接被爆しなかったことにより、「かえっ

てそれが長い間亡くなった友人や被爆者たちへの引け目となって、若い頃から詩を書き始めてからも目をそらし続けていて、やつとこのところ真正面から見詰めることができるようになってきた。」^⑥と述べている。

「引け目」というのは、自分だけ生き残って申し訳ない、という生き残った被爆者達に共通の慙愧の念であろうが、「真正面」に立てるようになったというのはどういうことだろうか。亡くなった人々と対等の位置に立つ、つまり和解するためにはこの死の風景を描いた詩に表象されているように、死の意識を持つこと、死者達との連帯感をもつことが必要なのであろう。しかしながら、言うまでもなくこれは読書行為過程において読者にも要求されることである。常用的なひらがなでは記されずカタカナで記述された「内部」の部分は、死者との連帯意識の共有化という、非日常的な問題を投げかけてくるのである。

しかしそれは本場に「非日常的」なこととはばかり考えてよいのだろうか。とりあえず言えることは、『死の島』をはじめとする文学がそのような場を生成し続けているということである。

注

1 『死の島』は昭和四十一年一月号より「文藝」にて連載が始まり、休載をはさみながら昭和四十六年八月号で完結している。本論で新潮文庫（昭和五十一年）を採用したのは、これが作者による最後の加筆訂正を経た『死の島』稿であるからである。なおこの文庫本の下巻「解説」末尾には、「本文庫において著者の加筆訂正を経ている」とある。ところで新潮文庫のあとに『福永武彦全集』

全二十巻が刊行され、そこに『死の島』も収録されているが、昭和六十二年に出された同全集パンフレットの一ページ目を参照すると、「小社（新潮社）は氏（福永武彦）の生前、昭和四十八年に著者自らが編んだ『福永武彦全小説』十一巻を刊行し好評を得ました。今度の全集ではこれをそのまま活かし、新たに詩、随筆、評論を中心に小説未定稿を加えて全二十巻に編集しました。」（括弧内論者補）とあるので、全集版は新潮文庫版以前の『福永武彦全小説』と同じであることが分かる。『死の島』本文の異動を確かめた研究は今現在ないし、論者自身の課題でもあるが、現段階で文庫本を採用した理由は以上の通りである。しかしながら、お手元に文庫本がなく単行本、全小説、全集等を所有されている方で、引用箇所を含めた前後の文脈等を確認されたい場合もあるかもしれない。『死の島』は多くの断章からなるが、その一つ一つはそれほど長くないので、どうか章名を頼りに該当箇所をご覧頂きたい。

2

「死体処理においても本能的に、自己防衛として感情麻痺におちいつていたといえる。死体処理にあたったのは軽症者である。死者が人らしく扱われるのは、健康な関係者が圧倒的に多い場合である。死者の方が多く、葬る人も傷を負い、瀕死の負傷者を抱えていれば、死体をモノとして扱わざるをえない。軽傷で余力のあ

る人が大量の死体を見、運び、名前も確認せず焼き、うめる。非日常的な異常な光景である。日常的な弔いにつきものの、情動の高まりをもっていては作業できない。死者に個人を感じない、人間を感じない、「麻痺状態」でなくてはできない。その意味で、感情麻痺も本能的に作動した自我防衛機制といえる。喜怒哀楽を感じるメカニズムにバリアを張ってしまったのである。それでもあとになって「モノのように扱ったこと」「何にも感じなかったこと」は、人間として許されないと、被爆者の心に深い傷として刻印されていくのである。（『ヒバクシャの心の傷を追って』中澤正夫、二〇〇七年、岩波書店、八五頁）

3

『意味という病』昭和六十二年、講談社文芸文庫、六十六頁。引用論文の初出は「マクベス論」文芸昭和四十八年三月号。

4

『ヒバクシャの心の傷を追って』（中澤正夫、二〇〇七年、岩波書店、一〇七頁、（中略）をはさんで一六七頁）

5

『ヒバクシャの世紀』ヒロシマ・ナガサキ・ピキニ（藤原修、岩波講座8 アジア・太平洋戦争）所収、二〇〇六年、三二二頁）

6

（『1945〜2007年 原爆詩一八一人集』（長津功三良ほか編、二〇〇七年、コールサック社、二二八頁）

7

同「編者あとがき」同書三〇〇頁）